

## 仮名文の花ひらく

山口 伸美

本講演のねらいは、仮名を考案したおかげで、日本人はどんなに優れた文学作品を生み出すことができたのかを、認識していただくところにあります。具体的に、平安時代の仮名文学作品を味わいつつ、以下のとおりの話をすすめます。

1.日本人は、なぜひらがなを生み出すことができたのか？ / 2.ひらがな文が切り開いた最初の文学とは？ / 3.ひらがな文は歌語りを文学に昇華した—伊勢物語・大和物語 / 4.ひらがな文は内面告白を可能にした—土佐日記・蜻蛉日記 / 5.ひらがな文は生き生きとした自然描写を可能にした—枕草子 / 6.ひらがな文は男と女の会話の妙味を創出した—源氏物語 / 7.ひらがな文は平安時代以後どんな経緯をたどったか？

日本人は、漢字が伝わる以前は、固有の文字を持たなかった。話し言葉だけでコミュニケーションを行っていた。でも、自分たちの子孫に何かを伝えたい時、声の届かないところにいる人間に何かを伝えたい時に、どうしても文字が必要になる。どうしたらいいのか？ 自分たちの話し言葉を十分に写し取れる文字を作り出すか？ それとも、すでに存在する別の言語の文字を借りてくるか？ 日本人は後者の道を選んだ。中国語を表すための文字である漢字を借りたのです。漢字は中国語のための文字ですが、表意文

字であったために、日本語をなんとか書き表わすことが可能だったのです。

日本語最古の文章として残存しているのは、7世紀後半に書かれた法隆寺金堂の薬師像の光背銘。漢字のみによって書かれています。でも、中国語の漢文とは異なり、日本語独自の語順や敬語表現の入りこんだ漢式和文(変体漢文)です。

さらに、日本人は、中国語にはない助詞・助動詞・活用語尾なども表記しようと工夫をこらした。それは、漢字の意味を捨てて、音だけを利用する万葉仮名を生み出した。でも、万葉仮名は、字形が漢字なので表記に時間がかかって効率が悪い。そこで、さらに万葉仮名の一部をとって書き記す文字や万葉仮名全体を書き崩す文字を思いついた。前者がカタカナに、後者がひらがなになったわけです。

ひらがなは、筆の流麗な動きを感じさせるために、男と女の手紙のやり取りに利用された。さらに、ひらがな文は以下にのべていくような文学の可能性を次々に花開かせていきます。

まず、ひらがな文は、それまで口で語り伝えられてきた説話を文学として文字化しました。『竹取物語』の誕生です。ただ十分に文字化することに慣れていないために、『竹取物語』には、卑猥な言葉や固い漢文訓読的な言い回しが見られますが、ともかく口承説話を物語という文学

形態に定着させることができたのです。

つづいてひらがな文は、当時和歌にまつわる世間話として語られていた歌語りを、見事に文学作品に昇華させました。『伊勢物語』に見られる和歌をクライマックスにもっていく巧みな文章構成、『大和物語』に見られるリアリティあふれる場面構成。これらの文学的な手法も、話し言葉を自在に写し取れるひらがな文だからこそ可能になった側面です。

また、当時男性たちは漢式和文で日記を書いていました。漢式和文では、形式的な行事などを記すことはできるが、真情吐露はほとんどできない。『土佐日記』は、そうした男たちの日記の文章を捨てて、ひらがな文で書き記した。ひらがな文で書くと、漢式和文とは違って冗談も書ける。皮肉も言える。『蜻蛉日記』も、夫への不満を話し言葉で読者にぶちまけた。それは、それまでにない迫力を帯び、読者の心に迫るものとなった。

また、清少納言は『枕草子』で、ひらがな文の持ついきいきした描写力を開花してみせました。「春はあけぼの」で始まる自然描写は、それまで取り上げられることのなかった自然描写を散文世界にとりこんだものとして注目されます。そのすばらしさに当時の人々は息をのみ、感動したのです。紫式部でさえ、自らの日記『紫式部日記』の冒頭を自然描写で始める試みをしています。また、紫式部の書いた『源氏物語』の自然描写には、『枕草子』の自然描写が取り込まれています。『枕草子』の面白さは他にもありますが、興味のある方は拙著『すらすら読める枕草子』(講談社)をご覧ください。

では、最後の『源氏物語』。これは、言う

までもなく、世界の古典に数えられる傑作です。ひらがな文の持つさまざまな可能性を存分に駆使していますが、ここでは男と女の会話が絶妙であることを指摘しておきたいと思います。たとえば、夫婦喧嘩のセリフ、女を口説くセリフなどに、登場人物の人柄が浮き彫りになるように書いています。(拙著『源氏物語を楽しむ』丸善ライブラリー、『恋のかけひき』主婦と生活社、参照。)

こんなふうには、話し言葉を自在に写せるひらがな文を手にしたおかげで、以上のような文学の可能性を次々に切り開いていったわけですが、その後ひらがな文はどうなったのでしょうか？

鎌倉時代以降、話し言葉と書き言葉は次第に別の道を歩き始めてしまいました。ひらがな文で書かれても、当時の話し言葉ではなく、古語になった昔の言葉を使う。擬古文になってしまったわけです。話し言葉の持つ魅力は反映されなくなり、衰退の一途をたどっていきます。

明治時代以降は、政府に採用された漢字カナ交り文が日本語文の主流となります。なぜ、ひらがな文が日本の代表的な文章にならなかったのか？ その理由は、漢字カナ交り文と比べると、第一に、読みとりにくい、第二に、漢語を取り入れにくい、第三に、情緒向きで、論理になじみにくい、などが挙げられます。

とはいえ、ひらがな文が、日本文学の可能性を次々に開花させ、世界に誇れる古典を生み出したことは、日本人にとって忘れることのできない事実です。

<本日の講演は、拙著『日本語の歴史』・『日本語の古典』(ともに岩波新書)に多く拠っています。>